4P041

一つの相補的な水素結合で繋がれた 混合原子価 Re(III)Re(IV) 錯体の固体 PCET 挙動 東理大理, ○ 原田翔平,松野 匠,磯谷和巨,山根健史,亀渕 萌,田所 誠

Solid–State PCET Behaviors of Mixed-Valence Re(III)Re(IV) Complex Connected with One Complementary Hydrogen Bond

O Shohei Harada, Takumi Matsuno, Kazuo Isogai, Takeshi Yamane, Hajime Kamebuchi, Makoto Tadokoro

Department of Chemistry, Faculty of Science, Tokyo University of Science

[Abstract]

Proton coupled electron transfer (PCET) plays an important part of biological reactions in proteins. In the previous study, we have succeeded in synthesizing a dimer complex with a Re^{III}/Re^{IV} mixed valence state linked by NH···N type hydrogen bonding of 2,2'-biimidazolate monoanion (Hbim⁻), [$Re^{III}Cl_2(P^nPr_3)_2(Hbim)$][$Re^{IV}Cl_2(P^nPr_3)_2(bim)$] (<u>1</u>). The temperature dependence of ESR spectra for <u>1</u> suggested intervalence charge transfer.From the analysis of single crystal neutron diffraction, the proton on the NH...N hydrogen bonding is considered to fluctuate along a wide single-minimum-like potential curve. These showed the existence of moving electron and proton on the hydrogen bonding, and hence <u>1</u> exhibits PCET phenomenon.In order to investigate the PCET behavior of <u>1</u> from a kinetic aspect, we replaced proton on the hydrogen bonding with deuteron, and compared the results of isotope shift in IR spectrum and single crystal X-ray structure analysis.

【序論】

電子とプロトンが同時に移動す るプロトン-電子連動(PCET)系 は生体内タンパク中でよく見ら れる反応機構である。先の研究 で、1つの NH...N 型水素結合で 連結された Re^{III}/Re^{IV} 混合原子 価 状 態 を も つ ダ イ マ ー 錯 体



[Re^{III}Cl₂(PⁿPr₃)₂(Hbim)][Re^{IV}Cl₂(PⁿPr₃)₂(bim)] (<u>1</u>) (Hbim⁻ = 2,2'-biimidazolate monoanion) の合成に成功した。 ESR スペクトルから、この錯体 <u>1</u> は水素結合したプロトン移 動に伴って Re^{III}-Re^{IV} 間の電子移動を同時に起こすと考えられている。また、中性子 結晶構造解析と X 線結晶構造解析の差 Fourier マップの結果から、水素結合した N...N 間の proton は移動障壁のほとんどない広幅なシングルミニマムのポテンシャ ルを描くように揺動していた。これは移動している電子と proton の存在確率を示して おり、明らかに PCET 現象によって移動している証拠になっている。そこで、 N-H...N 型の水素結合の proton を deuteron (D⁺)へと重水素化することで、同位体効 果によってプロトン移動の挙動に変化がないかどうか、赤外吸収分光と X 線結晶構造

【方法 (実験・理論)】

重水素化された [Re^{III}Cl₂(PⁿPr₃)₂(Dbim)][Re^{IV}Cl₂(PⁿPr₃)₂(bim)] (2) の合成は、グローブボ ックス内でモノマー錯体を重水素化することで行った。始めに原料である [Re^{III}Cl₂(PⁿPr₃)₂(H₂bim)]Cl を MeOD に溶解させ、乾固させた。この操作を3回繰り 返すことで重水素化された [Re^{III}Cl₂(PⁿPr₃)₂(D₂bim)]Cl を得た。さらにこの錯体を MeOD に溶解させ、ND3 を拡散させることで [Re^{III}Cl₂(P'Pr₃)₂(Dbim)]₂ を得た。最後に、 [Re^{III}Cl₂(PⁿPr₃)₂(Dbim)]₂ と [Re^{IV}Cl₂(PⁿPr₃)₂(bim)] を MeOD に溶解させ、この溶液に ND3 を拡散させると深紫色の単結晶として得られた。

【結果・考察】

合成した [Re^{III}Cl₂(P"Pr₃)₂(D₂bim)]Cl につい て¹H-NMR を測定し、目的の NH 部位の ピーク強度が減少したことから重水素化を 確認し、その積分値から重水素化率を 90.5% と算出した(Fig.1)。さらに 2 の赤外 分光測定では 1 の測定時に見られた NH の伸縮振動が 2495 cm⁻¹ から 2038 cm⁻¹ ま で大きくシフトしていることがわかった。 これは proton を deuteron に置換したこと

で質量が約2倍となり、同位体効果 Fig.1 ¹H–NMR spectra of [ReCl₂(PⁿPr₃)₂(D₂bim)]Cl complex を示したものだと考えられる。

重水素化前

1 回目

2 回目

3 回目

1.9

1.7

1.5

また、単結晶 X 線構造解析で錯体 2 の 結晶構造を明らかにした。その結晶学的 なデータは triclinic, P-1(#2), Mw =1420.44, a = 9.6913(1) Å, b = 10.206(2) Å, c =16.854(2) Å, $\alpha = 74.837(2)^{\circ}$, $\beta = 86.568(1)^{\circ}$, $\gamma = 75.307(2)^{\circ}, V = 1556.3(3) \text{ Å}^3, Z = 2, T =$ 298 K, $R_1 = 2.98\%$, $wR_2 = 6.98\%$, GOF =1.028 であった。この錯体 2 も錯体 1 と 同様に、 Re^{III} と Re^{IV}の錯体部位が 1 つの ND…N 型水素結合で連結されてい た。 X 線結晶構造解析では、水素結合し

た deuteron がダブルミニマムのポテンシャ ルとして観測された(Fig.2)。 これは、水素結

0.7 (/ppm)



Fig.2 Differencial Fourier Maps of 2

合した deuteron が proton より重たいため、移動障壁を感じているものと考えられる。 当日は、錯体1と錯体2について赤外吸収分光や差 Fourier マップの結果から、そ の違いを述べていく。

【参考文献】

[1] M. Tadokoro et al., Angew. Chem. Int. Ed., 46, 5938 (2007)